

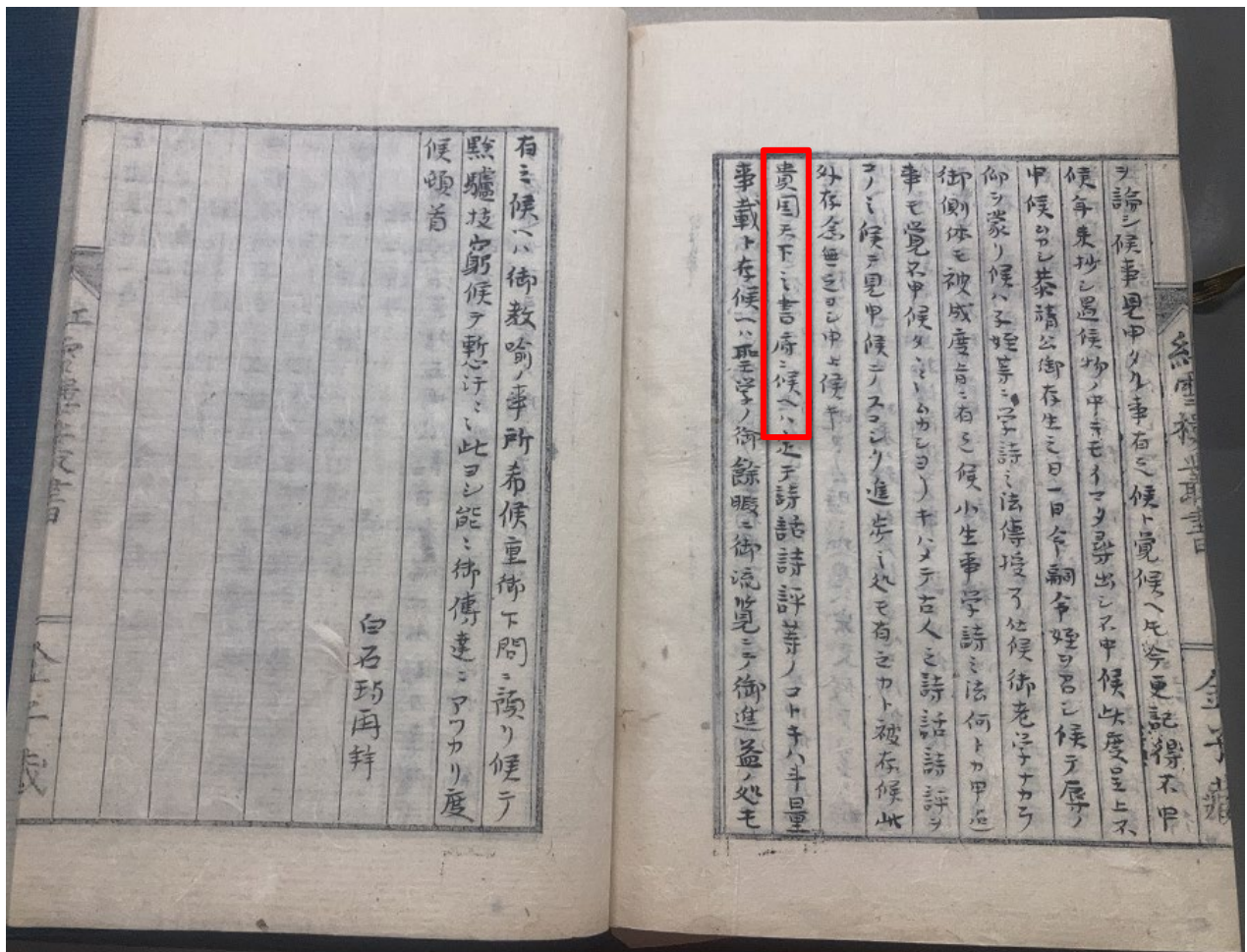
再発見された“天下の書府”：新井白石の言葉と尊経閣文庫

会期：2026 年 6 月 22 日（月）～9 月 30 日（水） 場所：中央図書館「思考の森」展示コーナー

「加賀は天下の書府」一よく知られたこのフレーズは、学問を重んじた加賀前田家五代当主・前田綱紀の蔵書を賞賛した新井白石の言葉として広く知られてきました。しかし、その言葉の典拠となる資料は、長く所在が不明でした。このたび、東京国立博物館で開催された特別展「百万石！加賀前田家（会期：2026 年 4 月 14 日～6 月 7 日）」に際して行われた前田育徳会の調査により、当館所蔵『紅雪樓（こうせつろう）叢書』が現存唯一の肉筆資料であることが確認されました。今回の企画展では、再発見されたこの貴重な資料の現物を展示するとともに、「天下の書府」の象徴である尊経閣文庫（注 1）の魅力の一端を、精巧な複製本（尊経閣叢刊）でご紹介します。

（注 1）綱紀は自身の蔵書に「尊経閣」と名付け、「尊経閣蔵書」と呼ばれています。「尊経閣文庫」の呼称は「公益財団法人前田育徳会」の通称

1. 再発見された“天下の書府”



金子盤蝸筆『紅雪樓叢書』（金沢大学附属図書館蔵）中の「天下の書府」が現われる部分

【展示資料1】金子盤蝸筆『紅雪樓叢書』

加賀藩の儒者・金子盤蝸（かねこばんか）（1793?-1863）が晩年に書き写した3冊からなる著作。その2冊目に「加賀は天下の書府」という言葉の典拠となる、新井白石（1657-1725、江戸幕府6代将軍・徳川家宣の侍講として正徳の治を主導した儒学者）が室鳩巢（むろきゅうそう）（1658-1734、綱紀時代加賀藩に仕えていた儒学者）の漢詩に対する批評を述べた「室新詩評（しっしんしひょう）」と呼ばれる書簡が収録されている。今回展示しているページ中の「貴国天下の書府に候へば」の部分が、この言葉の典拠となる現存唯一の肉筆資料である。なおこの書簡の相手は、小瀬復庵（おぜふくあん）（1669-1718）という綱紀の側近の加賀藩医で、『太閤記』『信長記』の著者・小瀬甫庵（おぜほあん）の後裔である。

■当館所蔵『紅雪樓叢書』の来歴

当館所蔵『紅雪樓叢書』は、水上一久（みづかみいちきゅう）（金沢大学法文学部教授）氏旧蔵資料中の1点で、1977年に当館が古書店から購入したもの。この資料中に「室新詩評」が含まれていることは以前からいくつかの資料で指摘されていたが（注2）、金沢大学附属図書館蔵であることは知られておらず、今回、盤蝸の自筆本が改めて「再発見」された形となった。

（注2）過去次のような文献で紹介されてきた。

- 『石川県史』第3編 p.276, 1929年 国立国会図書館デジタルコレクション（以下「国デジ」）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1186805>
- 水上一久「新井白石と加賀藩」北陸史学 7, pp.1-15, 1958年



2. “天下の書府”はどう伝わったか？

【展示資料2】『新井白石全集第6巻』1907

（明治40）年 国デジ <https://dl.ndl.go.jp/pid/990986> *要登録

「天下の書府」に関する記述を含む「室新詩評」が翻刻されたものに明治末期に刊行された『新井白石全集』第6巻がある（右図）。「室新詩評」は、内藤耻叟（ちそう）（1827-1903）が書き写した『碧海（へきかい）叢書』所収のものが底本だが（注2）現存していない（明治期には存在していたがその後、戦争などのため消失したと考えられる）。この資料とは別に「室新詩評」の内容を収録しているのが、上述の『紅雪樓叢書』である。なお、白石からの書簡のオリジナルの詳細は現在不明となっている。

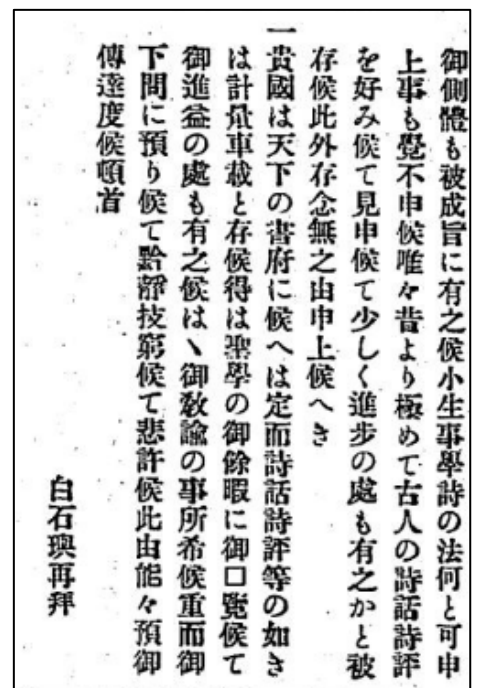
『碧海叢書』『紅雪樓叢書』ともに成立年は不明だが、各筆者の晩年の筆と考えられており、金子盤蝸の方が内藤耻叟よりも一世代ほど年輩であることから、『紅雪樓叢書』の成立が『碧海叢書』に先行する可能性が高い。

この部分に記載されている内容は、鳩巢からの質問に対し、漢詩の講評に加え、作詩の学習法について答えたもので、「貴国は天下の書府なので、詩話や詩評は沢山お持ちでしょう。これらを参照すれば私から教えることはほとんどありません」と綱紀の蔵書についての讃辞を述べている。

（注2）『碧海叢書』に「室新詩評」が収載されていたことを示す資料としては、以下がある。

東大史料編纂所所蔵『諸書要目』27の「内藤碧海集」

<https://clioimg.hi.utokyo.ac.jp/viewer/view/idata/400/4105/47/27/00000169?m=all&n=20>



【展示資料3】近藤磐雄編『加賀松雲公（上・中・下）』羽野知顕, 1909.2

加賀前田家十六代当主・利為（としなり）の意向で編纂された前田綱紀（松雲公）の伝記。利為は「第2の松雲公」を自認し、1926年に育徳財団（現・前田育徳会）を創設。この本は皇室をはじめ、前田家と交流のある華族・名士、大学・図書館に贈呈された。

上 国デジ <https://dl.ndl.go.jp/pid/781989> 中 国デジ <https://dl.ndl.go.jp/pid/781990>

下 国デジ <https://dl.ndl.go.jp/pid/781991>



【展示資料4】前田綱紀画像（複製）

前田育徳会が1906（明治39）年の加賀前田家十六代当主・利為の結婚を記念して企画された綱紀の事蹟顕彰の一環で、下村観山（1873-1930）に委嘱して制作された肖像画。展示資料は、藤岡作太郎著『松雲公小伝』高木亥三郎, 1909.9 所収のもの。国デジ <https://dl.ndl.go.jp/pid/992507/1/16>



3. 「天下の書府」の中のお宝たち

尊経閣叢刊として復刻され、前田育徳会から寄贈された資料の中から3点を展示する。

尊経閣叢刊とは…加賀前田家が所蔵する古文書や古典籍のうち、特に貴重と考えられるものを1926（大正15）年～1952（昭和27）年にかけて、前田育徳会が写真複製した叢書で計64点が刊行された。

前田家本枕草子 全四帖（複製） / 清少納言 鎌倉時代写 ※オリジナルは重要文化財

清少納言による随筆。前田家所蔵のものうち四帖から成るこの写本は、章段の配列は他の諸本とは異なり、類似の写本が存在しない孤本で「前田家本」と呼ばれている。筆者は鎌倉時代の公卿・歌人二条為氏（1222-86）と言われ、現存する写本中最も古く書写されたとされる。展示ページは「はるはあけぼの」で始まる冒頭部分。

土佐日記（複製） / 紀貫之；藤原定家筆 1235（文暦2）年写 ※オリジナルは国宝

紀貫之作、土佐守の任を終えて京に戻る際の随行女性に託して記された日記体の紀行文。前田家所蔵のものは、京都蓮華王院に伝来した貫之自筆本を藤原定家（1162-1241）が書写したもの。展示ページは「おとこもすなる」で始まる冒頭部分。

類聚国史 第百七十九卷（複製） / 菅原道真編纂 鎌倉時代写 ※オリジナルは国宝

宇多天皇の勅により、892（寛平4）年に菅原道真（845-903）によって編纂された、六国史の記事を特定のテーマごとに整理・分類した部類記。平安時代の宮廷社会における政務の実用書として重用された。前田家所蔵のものは、平安時代末期から鎌倉時代初期にかかる現存最古の写本。加賀前田家は、三代・利常の頃から菅原姓を名乗り、道真の後裔を称した。とりわけ五代・綱紀は道真を深く敬慕し、その著作や伝記資料を書写・蒐集している。

■参考文献

このガイドペーパーの執筆に際しては、次の文献をはじめ、特別展「百万石！加賀前田家」の図録を参考にさせていただきました。

柳田甫「いかにして「加賀は天下の書府」となったか」 前田育徳会創立百周年記念特別展「百万石！加賀前田家（東京国立博物館、2026年4月14日～6月7日）」図録, pp.337-341, 2026年

加賀前田家系図 ※特別展「百万石！加賀前田家」図録から引用

※人名の表記は『加賀藩史料 編外』に依拠し、將軍・大名家の息女名には「姫」を付した。
また歴代当主には代数を付し、()にて当主在任期間を示した。

